

イギリス児童文学における階級性の諸相

——『秘密の花園』を起点として——

武田ちあき

I 序

児童文学における階級性・階級意識は、戦後民主主義を奉ずる現代の日本では極力避けられる話題であり、とくに国語教育では正面切って扱われることのないテーマであろう。しかし英国では、階級性は子どもにとって社会の現実、生活の実感である。そして階級意識は良くも悪くもアイデンティティの根であり、自分の一部、ある種の「自然」なのだ。

子どもにとって生活そのもの、といえる階級性は当然、イギリス児童文学の重要なモチーフになる。本稿では、このジャンルの古典であるF・H・バーネット(F. H. Burnett)の『秘密の花園』(*The Secret Garden*, 1911)を起点とし、その変奏としてE・ガーネット(E. Garnett)の『ふくろ小路一番地』(*The Family from One End Street*, 1937)、およびK・M・ペイトン(K. M. Peyton)の『フランバーズ屋敷の人びと』(*Flambards series*, 1967-1981)をとりあげ、20世紀の英国の社会事情と国民意識、英国性のゆくえが子どもの世界にどう描かれているかをたどり、階級性が子どもの「ことば」、「くらし」、「からだ」にどう現れているか、に各作品の焦点・論点を絞って、イギリス児童文学における階級性の諸相の一端を、紙幅の許す範囲で別出したい。

II 階級とことば——F・H・バーネット、『秘密の花園』(1911)

『秘密の花園』は一般に「インド帰りの孤児メアリが、召使の弟ディコン、館の主人の息子コリンと共に、荒れ果てた庭を再生する物語」とされ、ガーデンのビジュアルなイメージが前景化されがちだが、「ことば」に着目すると、これは「上流階級の不健康な子女、メアリとコリンが、労働者階級の自然児ディコンのヨークシャー方言を獲得する物語」であり、ことばは健康な生命力の象徴として、花園と並ぶ重要な位置を占めている。さらにその生命力の「使途」を追うと、「領主の嫡子コリンが、植民地帰りのメアリと野育ちのディコンを配下に収めることで、絶えかけていた家督を継承する物語」という驚くべき位相が浮かび上がる。じつは階級制度の存続こそが、この作品の中心的な主題であり、最終的な着地点なのである。

物語の前半、社交に忙しい両親にネグレクトされて育ち、生活能力も言語能力も、自我すらも未発達で、インドでもイギリスでも召使に命令するか暴言を吐くかだけだったメアリが、駒鳥と会話を交わし、大人も手こずるコリンを説き伏せるまでになる、そのコミュニケーション能力の急速な発達ぶりは、じつにめざましくドラマチックである。しかしそれは作品全体から見て、ほんの露払いにすぎず、メアリは主人公ですらない。真の主人公は、そして物語が集約する先は、幕切れの一行の「コリン坊ちゃま！(Master Colin!)」(358)である。執事がパーティで訪問者の名を告げるのと同じ、この言い方は、館の奥に寝たきりだったコリンの、公の舞台への登場と、館の主人(master)の後を継ぐ大団円を、高らかに宣言しているのだ。

『秘密の花園』出版当時、英国は未曾有の貴族存亡の危機を迎えていた。1905年の総選挙以後の自由党政権下、1909年には「人民予算」が提出され、軍備費・社会政策費の財源を地主貴族階級の負担増で賄うべく、相続税の大幅引き上げ、および土地税と高額所得特別付加税の導入がなされる。1911年には「議会法」が成立し、貴族院の権限は実質的に剥奪される(Hibbert 179-180)。この税制改正と議会制度改革により、経済力と政治的発言力の両方で貴族階級は決定的な打撃を受ける。すぐ後の第一次世界大戦では上流階級の継嗣が続々と戦死し、家督相続の危機はさらに深刻化する。以降、20世紀を通じて、貴族階級は不可逆的な没落の末路をたどることとなる。

コリンが病弱で、父も身体障害者、という設定は19世紀ヴィクトリア朝の進化論・遺伝学・優生学の言説を色濃く引きずっており、帝国主義の時代なのに徴兵検査不合格、の含意がある。したがってコリンが将来の目標として「運動選手」を挙げることには、1896年開始の近代オリンピック(とくに1908年ロンドン大会)の「勝者」のイメージと、生存闘争における適者生存のイデオロギーが反映しているが、そのコリンがはたして生きのびるかどうか、というストーリーには、さらに切迫した20世紀初頭の時事問題としての、貴族社会の未来、英国の国家としての命運が投影されていたのである。

この難局に投入されるのが自然の生命力、すなわち自然の「魔法(Magic)」(271)で、それが自然の「ことば」に具現し、ディコンとメアリを経由してコリンに摂取される。3人が使うヨークシャー方言は、ロマン派的な「自然に近いことば」であるのみならず、自然の魔法をかけるための「呪文」として機能する、「言霊」を帯びた生命体である。たとえば“wick”(125)という形容詞は、作中で“alive”, “lively”(125)、方言辞典では“energetic”

(Maskill 45) と説明される。この味わいが「いぎいぎしてる」(畔柳 152) という訳には出ているが、「ぴんぴんしてる」(土屋 165, 野沢 128) では伝わらない。なまりのない、標準語として通用してしまう表現では、野趣も地霊も魔力も抜け落ち、土地のことばの担ういのちが繋がらない。メアリもコリンも、ディコンのことばに付着した土の有機性によってこそ、まさにその通り「いぎいぎ」してくるのだ。¹⁾

そしてかれらは、みずからことばを使うことで現実を変革する力を発揮するに至る。物語の後半では、願いを叶える祈禱の文句が頻出する。メアリが初めて立ち上がろうとするコリンのため、一心につぶやく「できる！ できる！ できる！ できる！ (He can do it! He can do it! He can do it! He can!)」(268)。コリンの母の霊が夫を呼び寄せる「庭にいるわ (In the garden)」(344)。回復期のコリンが言い放つ「ぼくは永遠に生きる！ (I shall live for ever and ever and ever!)」(255, 326, 342)。これらの、幾度となく反復される魔法の呪文は、実際にコリンを健康にし、父子を和解させ、600年続いてきたクレイヴン家を安泰にする、という最終目標を達成するのである。

意志の力と健康、という点でグリスウォールドは、この物語とクリスチャン・サイエンスの結びつきを指摘している(241-244)。²⁾ たしかに、アメリカに在住していた作者バーネットは、1879年創始のクリスチャン・サイエンスに関心を寄せていたし、その信仰療法のサンプルとして『秘密の花園』を読むことも可能ではある。しかし、より注目すべきは、新興宗教の新しさではなく、その癒しの目的に、旧体制・階級社会の擁護が配されていることであろう。バーネットの知られざる傑作『消えた王子』(*The Lost Prince*, 1915) は、やはり健全な精神と身体の手によって、500年も途絶えていた中欧の国家サマヴィアの王家が復興を遂げる物語であり、名作『小公子』(*Little Lord Fauntleroy*, 1886) も『小公女』(*A Little Princess*, 1905) も、身分の回復、階級社会の存続という同じ線上にある。その意味では、 Coppola による映画版『秘密の花園』でコリンとメアリの婚約話が出てくるのも、原作にない大胆な脚色というより、いたって自然で妥当な解釈といえる。³⁾

それゆえコリンの方言使用は、上流階級が労働者階級の方に「降りていく」ものではなく、その逆で、労働者階級の養分を「吸い上げる」ものであり、みずからが領主であるヨークシャーの、土地の宝の嘆賞、所有財産の確認という意味をもつ。メアリとの親愛は、インドから来た親戚、すなわち家系・

植民地の関係強化。ディコンとの友情は、領民との関係安定。すべてが究極的にはヒエラルキーの頂点に収奪され、その安定に寄与する。⁴⁾つまり方言は、階級を本当の意味で「越境」することはなく、それぞれの階級に異なる用途で所有される社会財、という位置づけになる。労働者階級には生活言語として、上流階級には非日常的なカンフル剤として。

ことばをめぐる、これほどの階級間の交流を経てなお、収まる形が旧来の階級社会、というこの物語の結末は、それ自体が、階級制度の存続を願い、階級性の肯定を謳う祈りのことばとして響き、そう唱えたいくなる時代の空気、英国国民の心性をも伝える。かくして秘密の花園の美しさは、それを擁する館の盤石を伴ってこそ、読者である英国の子どもたちに魅力を発揮していたことがわかる。

III 階級とくらし——E・ガーネット、『ふくろ小路一番地』(1937)

『秘密の花園』の四半世紀後、戦間期に世に出た『ふくろ小路一番地』は、イギリス児童文学史上初めて、労働者階級の子どもの暮らしを描いた作品である(石井 325, 松岡 328-329)。8つの出版社から断られる⁵⁾ものの、刊行されるや英国児童文学最高峰のカーネギー賞を受賞し、2007年のカーネギー賞制定70周年記念歴代ランキングでもトップテン入りを果たす(松岡 332)。日本では1957年に石井桃子の訳が岩波少年文庫で出ている。

『ふくろ小路一番地』のラッグルス家は、貧しくても明るい健全な大家族。これはまぎれもなく『秘密の花園』のディコンの実家、サワビー家の変奏である。『ふくろ小路一番地』の冒頭、牧師が洗礼祝いとしてラッグルス家の母親に1ポンド紙幣を贈る場面(19)は、『秘密の花園』の末尾、領主がお小遣いとしてサワビー家の子どもたちにソヴリン金貨(1ポンド)を与える場面(348)を引き継いでおり、両作品はこの同じ額面でオーバーラップする。

『秘密の花園』ではディコンが館の跡目相続の目的に従属するのに対し、『ふくろ小路一番地』では労働者階級そのものが主人公として自立し、作品世界の中心に位置することが、タイトルの*The Family from One End Street*で堂々と打ち出される。この原題『袋小路出身の一家』は「行き止まりから始まる一家」とも読め、「最下層のどん詰まり」がベクトルの終点ではなく始点に置かれている。邦題『ふくろ小路一番地』の原表記“No.1 One End Street”という住所も、「行き詰まりの極致」にありながら「貧乏でもナンバーワン」の家族の在り処を示す。これらのフレーズは、労働者階級に対する悲観的な

見方を逆手にとって内側から裏返し、明るく前向きに現状を肯定してみせる。

こうしたスタンスをなにより雄弁に具現しているのが、作者自身の手掛けた挿絵である。王立美術院に学び、画家としても名を成したガーネット⁶⁾の線描画は、素朴かつ優雅で上品な画風で、子どものかわいらしさ、みずみずしさ、肌のやわらかさやあたたかさまでが伝わってくる。そこには、大きなお屋敷のお嬢様として育ちながら、絵の仕事の取材で貧民街を知った彼女の、下層階級への嫌悪ではなく敬意があふれていて、やはり裕福な階層出身ながら下層の人々に目を向け心を寄せた、いわさきちひろの童画を彷彿とさせる。

ガーネットの労働者階級観は、ラッグルス家 (the Ruggles) という命名にも看取できる。ラグ (rug) は炉前の敷物。英語では暖炉 (hearth) は家庭 (home) の換喩である。この音が想起させる rag (ぼろ布) は、この家の、ごみ屋の父ちゃん・せんたく屋の母ちゃんの両方の仕事に縁がある。すなわち、職業としては最底辺の、この一家にこそ、温かな家庭の理想が託されているのだ。

物語で労働者階級に注がれる視線は、共感に満ちている。たとえば、この夫婦がテート美術館で絵画を鑑賞する場面 (6-7)。巨匠サージェント (Sargent) を知らない父ちゃんは「軍曹 (sergeant) がこんなもん描いてる暇あるんかね、軍隊ってのは楽な商売だな」、母ちゃんは「こりゃあつづりがまちがってるね、あたしのおじさんも警部 (sergeant) になるとこだったけどね」。かれらの無知・無教養も、愉快的ユーモアとして包容される。

一方で父ちゃんの兄、チャーリーおじさんは同業のごみ屋ながら演説好きで、労働者大学に週3日通い (290-291)、自分のごみ馬車を引く馬に、前の持ち主がバーナードだから、と文豪にちなんでバーナード・ショー (Bernard Shaw) と命名する (294) ほどの、教養と機知の持ち主。またラッグルス家の次女ケートは成績抜群で、奨学金を獲得して進学する英才 (39) と、この階級の潜在能力や向学心にも目配りがされている。母ちゃんがせんたく屋の商売柄、当時流行の人絹 (レーヨン)⁷⁾ に詳しい (288) ところにも、この階級ならではの機敏な才覚が光っている。

作者は現実も直視する。ケートの進学を断念させかねない経済的困窮 (45-46)。長男ジムの「どうせ死ぬまでここにいるんだ」 (87) という子ども心にも兆す閉塞感。親戚どうしの、えげつない見栄の張り合い (269)。だがその筆致ににじむのは、告発でも糾弾でもなく、大いなる肯定である。みみっちさ、品のなさ、底意地の悪さ、いさかい、すべてありのままに出てきて、いやみがない。労働者階級の肝っ玉、すっぴんのいさぎよさ、泣き笑いのにぎやか

さ、愛すべき人間らしさ。こうした庶民の人情は、江戸の落語にも通じる。

そしてこの現実の上に、作者は楽しい夢を描き出す。ラッグルス家の子どもたち7人が、それぞれ各章でヒーローやヒロインとなり活躍する筋立ては、児童文学らしい一種のおとぎばなしであり、それがこの階級のくらしに希望と楽観を打ち立てる応援歌となっている。

冒険に憧れて船に潜り込み、あわや密航しかけるジムは、英文学における「海洋少年ジム (Jim, the sea boy)」の系譜に連なる。R・L・ステューヴンソン (R. L. Stevenson) の『宝島』(*The Treasure Island*, 1883) のジム少年、ジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の『ロード・ジム』(*Lord Jim*, 1900) の青年ジム、アーサー・ランサム (Arthur Ransome) の『ツバメ号とアマゾン号』(*Swallows and Amazons*, 1930) のジムおじさん、同シリーズ第7作『海に出るつもりじゃなかった』(*We Didn't Mean to Go to Sea*, 1937) の若者ジム、エリナー・ファージョン (Eleanor Farjeon) の『町かどのジム』(*Jim at the Corner*, 1934) のジム老人、また変異型としてエドワード・アーディゾーニ (Edward Ardizzone) の『チム』(*Tim*) シリーズ (1936-1977) のチム少年をも擁し、連綿とつながるこの伝統⁸⁾の重みと輝きを帯びて、ラッグルス家のジムはいつそう大きな存在感を発揮する。

末っ子のウィリアムは、お祭りの赤んぼコンクール、一歳未満の部で優勝。審査結果発表の司会の呼び声、「ウィリアム坊ちゃん (Master William)」(178) は『秘密の花園』の「コリン坊ちゃま (Master Colin)」と響き合う。そして「優勝者ウィリアム」は、イギリス人にはもちろん、ノルマン王朝の開祖、「ウィリアム征服王」(William the Conqueror, 1027-1087) の呼称を連想させる。「耳がおかしくなるほど」(179) の万歳三唱を浴びるこの乳児は、町民の英雄であるとともに、労働者階級の王子でもあるのだ。

その上、チャーリーおじさんの馬、バーナード・ショーは全ロンドン重量荷馬車コンクールで11連覇を誇る、ごみ馬車のチャンピオン。一家の目の前で12勝目を挙げ、馬までがヒーローになって、ラッグルス一族は英国労働者階級の代表の座を固める。

その一方、長女のリリー・ローズは「一日一善」で母を手伝おうとして、人絹のアイロンかけに失敗。謝りに行った先の奥様に将来の希望を聞かれ、それでもせんとく屋になりたい、蒸気洗濯をしたいと答えて母を感動させる。

ケートは入学前に制帽をなくし、買い直すお金を自分で稼ごうとキノコ採りに行き、野生とまちがって栽培キノコを採る。見とがめた農場主に経緯を

説明し、学校を出たら農業をやる、自動耕作機械や化学肥料を使うのだ、と進路志望を明かすと、農場主は「いまどき百姓になりたい子どもがいるとは」(79)と感銘を受け、帽子を買いなさい、とキノコをくれる。

華やかなイメージをまとう男の子たちに対し、女の子たちは英国の未来を支える「地の塩」として、物語を地に足のついたものになっている。志した道の途中でつまづき、涙するふたりを、おとなたちは温かく励ますのである。

上の階級との関係の複雑さ・微妙さも、省かれることはない。ラッグルス家のしつけをほめてくれる「ほんとうのレディ」との交流(158-159)。気取った発音をする上流の子どもたちとの摩擦(139)。はした金で感涙するラッグルス氏を憐れんでいいのか羨んでいいのかわからなくなる作家(240-241)。

それらをふまえた上で、この作品は労働者階級独自の価値を、たくましく陽気なくらし、という形で表現する。生活の苦労を笑い飛ばすバイタリティ、階級内の連帯感。それは確実に、英国の国力の大きな一部なのである。

このように『ふくろ小路一番地』は、イギリスにおけるくらしの階級性を「解消すべき格差」というより「相互に尊重すべき異文化」として提示している。⁹⁾ 縦の上下関係よりも、横の並列関係をなす、この図式¹⁰⁾は、どちらの階級の子どもにも、健全な自意識と他者への理解を可能にする見方を開くものだったといえよう。

IV 階級とからだ——K・M・ペイトン、『フランバース屋敷の人びと』

(1967-1981)

第二次世界大戦後に発表された『フランバース屋敷の人びと』は、20世紀初頭のイギリスで、フランバース屋敷に引き取られてきた孤児クリスチナが、飛行機乗りとして時代の最先端を行く次男ウィルと駆け落ちするも、ウィルは戦死。屋敷に戻り、心優しい馬丁ディックと再婚するが、女主人の務めと両立せず離婚。やがて、傲岸だが乗馬の名手である長男マークと、相通じる魂を見出して再々婚する物語である。

時代設定も筋書きも、あきらかに半世紀前の『秘密の花園』をなぞるこの作品は、「孤児として館に来たメアリが、ディコンと結婚するがコリンのもとに戻ってくる話」と読める。労働者階級の男の名ディック(Dick)がディコン(Dickon)と重なっていることにも、その意図がのぞく。

本編の三部作、第1～3巻(1967-69)では、クリスチナとディックの結婚で「階級を超えた愛の成就で、因習的な旧体制が否定される、モダンな物語」

かと思いきや、続編の第4巻(1981)はディックとの離婚・マークとの再々婚で「肉体にまで内在化された階級制度の強固さ」へ着地して、物語はまるっきり裏返る。¹¹⁾ この大どんでん返しのプロットと、「階級はからだに在る」というテーマが、この作品を衝撃的なまでに印象的なものとしている。

メイドを妊娠させて恥じないマークのくだりは岩波少年文庫の翻訳作品として異色であり、対象が「中学以上」とはいえ、よく入れたものと思えるが、イギリスではカーネギー賞受賞作。この本を子どもに推薦する国の意識として、「階級は直視すべき現実」という前提がうかがわれる。

そのように尊大で傲慢なマークは、上流階級の放逸さと無責任さの権化、上流階級への嫌悪感のターゲットとして登場する。まさかこの評価がひっくり返るとは、読者の誰も思わない。¹²⁾ これは前述した20世紀初頭の危機の時代の、上流階級の奇跡的な起死回生の物語であり、その点で『秘密の花園』と重なっているのである。

マークとクリスチナを最終的に(そしてじつは最初から)結びつけるのは、上流階級の、ほとんど原始的・本能的な、肉体の悦びとしての馬上の狩猟である。乗馬と狩猟は民族の血、セックスよりも強い絆、として描かれる。狐狩りは知性を凌駕する衝動、上流階級の人間の業。¹³⁾ マークはクリスチナを馬の乗り方ゆえに愛していると公言するが、クリスチナも実質同様である。それは深いところにある、もはや愛以上の絆——階級内の連帯に根差す。¹⁴⁾

クリスチナと結婚しても、外に女を作るディックが、同じ労働者階級の女と生活にこそ心底安らげることも、つぶさに描かれる(IV 83, 126)。からだどくらしの支配力がそれぞれの階級でいかに強いかが、否応なしの現実として読者の眼前につきつけられる。クラス・ギャップはカルチャー・ギャップ、という『ふくろ小路一番地』の視点を、『フランバーズ屋敷の人びと』は、そのそれぞれのカルチャーの生活感覚は身体感覚である、と補強するのである。

この第4巻の大逆転も見かけほど唐突なものではなく、じつは全巻を通じてテキストの随所に、相反する価値観や両義性が、豊富かつ等分に仕込まれている。玉虫色の布地が光線の方向によってまったく別の色に見えるように、またベルベットの織地が毛羽の方向によってまったく別の光沢に変わるように、ウィルやディックに肩入れして読んでみると全く気づかない物語の様相や色合いが、いったんマーク側に立って読んでみると思わぬ強さで輝き出す。

マークの「彼一流の鈍感さ」(II 76)は往々にして状況の救いとなる。破天荒な馬の乗り方は「父そっくり」(I 6)、「祖父そっくり」(I 9)で、ラッ

セル家代々の相続財産、貴族の遺伝子でもある。「先頭に立って突っ走らなくては気がすまない質」(V 188)は、将校としては最高の資質になる。第1巻のオープニングの狐狩りで、マークが跳び越えた場所でウィルは落馬。騎手の技量が天才と凡人、と判明するこの開幕場面ですでに、全巻におけるふたりの勝負はついていた、ともいえる。

クリスチナは乗馬の跳躍を習って「たとえようもない幸福感」(I 75)に包まれ、落馬したウィルに「かすかな軽蔑」(I 75)を覚えていた。乗馬も狩猟も大好きになり¹⁵⁾「自分は馬の一部」(I 177)、「こここそ自分の住む世界」(I 177)と自覚する彼女からすれば、ウィルが飛行機で飛ぶのは、馬で跳ぶことの哀れな代用にしかならない、という見方すらできただろう。¹⁶⁾ 事実、ウィルとの駆け落ちは、馬の喪失感(II 8)と屋敷へのホームシック(II 10)を重度に伴う。第2巻は彼女が飛行機で飛ぶことへの強烈な心理的恐怖感と肉体的嫌悪感の描写に終始する¹⁷⁾ といってよく、ウィルの戦死は、その苦しみからの解放ですらある。「階級のへだたりを憎みはしたが、一方ではそういうものだとなんげとも納得してもいた」(I 84)というバランスは、そのどちらに転んでもおかしくない。

この両極でのクリスチナの選択を社会的意味から見ると、これは保守反動の勝利の物語であり、そちら側からは、このテキストには保守派を擁護する伏線が周到に張りめぐらされていた、という言い方もできる。

同時にその選択は、彼女の人的成長の物語という大枠も形成する。

両親の莫大な遺産を相続する予定のクリスチナは、フランバーズ屋敷存続のため、もともとマークの結婚相手として引き取られた。その「打算」を当初は蹴飛ばす彼女が、結局はそこに自分の道を見出して、屋敷を買い取り、復員してきたマークを迎え、長子相続制の長子を屋敷ごと、今度は自分が引き取ってみせるのだ。この大逆転の大団円は、大いなる女性の快挙である。「存続」の表舞台に、その意思を意識的に持つ女性、その財力まで持つ女性として登場するクリスチナは、『秘密の花園』のメアリの何歩も先を行く。

クリスチナの3回の結婚の、階級内の進歩派、階級の越境、階級内の守旧派という軌跡は、20世紀初頭の「新しい女」がどんどんバージョン・アップしていく過程でもある。彼女のヒロイン性は「新しい時代の個人の自由意思」から「伝統を担うノブレス・オブリージュ(高貴なる者の義務)」へグレード・アップし、より偉大なスケールの尊厳を獲得する。¹⁸⁾ これは女性の進出先がアンシャン・レジーム(旧体制)、ということなのだ。個人の幸福が国

家の幸福と等価になるほどの責任感に目覚めることで、クリスチナの人間性は俄然、深みを増し、物語はおとぎばなしの域を一気に破り、大河小説の境地に至る。

古くからの場所を守るために戦う (I 211)、と出征するマークの使命感が、勇猛だけでなく崇高な美德として、そこで光り出し、本来の伴侶として、いかにもふさわしい姿をとる。瀕死の重傷で戦地から帰郷したマーク、そして昼夜を徹して看護するクリスチナは、ともに 1910 年代に上流階級が直面していた危機の隠喩である。からだの快復、生命の維持がすべてに優先するその状況は、ふたりの人生の本質的な重なりを本人たちに自覚させるとともに、読者にも納得させる。3 人の男性がそれぞれ代表する世界を実際に生きた上で旧制度の維持へと戻ってくるクリスチナの生き方は、現実からだが受けつけるかどうかに基づく、経験的な説得力の重みを備えている。¹⁹⁾

正編出版から 12 年後²⁰⁾に出た、この続編の急転回には、その間の 1970 年代のイギリスの社会情勢も関与している。ひとつには、英国病とサッチャリズムを経験し、目の前の社会と政治に失望した国民の、本来の英国性への回帰の渴望である。第 4 巻は「読者の熱いラブコール」(掛川 362) に応えて執筆されたもので、そうしたリクエストの存在自体が、時代の風潮とニーズの証であり、これを受けて立った作者の回答＝結末は、時代の声とも言える。

もうひとつの背景には、当時のウーマン・リブ、女性解放運動がある。女性のからだの感覚が人生の羅針盤であるというテーマにも、また露骨な表現ではないにしろ、女性の性欲 (V 275) や避妊 (V 177-178) がこともなげに語られるところにも、この第二波フェミニズムの反映が見られる。クリスチナの「古いもの」を取る選択は、新しい女性観と両立し、現代の読者にも共感を呼ぶ決断として提示されているのだ。

このように『フランバーズ屋敷の人びと』は、かなりヤングアダルト小説寄りの要素を含んでいる点でも、『秘密の花園』の発展型といえる。そして、20 世紀後半になってなお、階級制／階級性に回帰し、それを堂々と肯定する児童文学として、『秘密の花園』の正統な継承者なのである。

V 結

『秘密の花園』から伸び広がる枝葉を追うことで検証されたのは、イギリスにおける階級性の、根の強さである。それは英国性そのものである、とすらいえる。

児童文学における階級性、というテーマの意味は、そこにある。社会の現実への目は、子どもだからこそ必要。イギリスにおいては、このファクターなしでは目の前の現実が理解できないのである。

本稿で扱った三作品は、イギリス児童文学で階級性が表現される際のかたち、「ことば」・「くらし」・「からだ」をそれぞれ代表している²¹⁾が、これらの要素は、イギリスの教育の根幹をなす思想および方法論と連動している。「からだ」でわかることの大切さは、イギリス経験主義に発し、体験型教育の土台となっている。「くらし」と直結した「ことば」の使い方は、イギリス国語教育の一大目標であり、実践型学習の大綱をなしている。²²⁾

児童文学における階級性といえば、日本では政治的なイデオロギーのはいりこみかねないタブー、という印象がある。しかしイギリスという国の社会と文化、そして現実主義のもとでは、もっと根本のレベルで子どもの成長と教育と芸術に深く関わる特性として、正面から捉えられ、取り組まれてきたものなのである。

〔注〕

- 1) メアリとディコンの使うことばのスタイルは、ふたりの作る庭のスタイルにも対応している。雑多な植物が伸び合うコテージ・ガーデン様式を好むふたりは、「すっかり、しっかり、きっちり刈りこんじまってる (All clipped an' spick an' span)」(129) 整然とした庭を好まない。同様に、なまりを削ぎ落した訳文はつるつるとのっぺらぼうに滑り、もとのテキスト/テクスチュア(織地)がもつ、きめの粗い肌合いやふくよかな手ざわりを失って、立体が平面に還元されてしまっている印象を与える。
- 2) 『秘密の花園』に交差する各種テキストとのインターテクスチュアリティについては、山本(2011)を参照のこと。
- 3) ひとりで着替えもできなかったメアリが、単身ひそかに花園に通い、館の探索に乗り出し、他者との関係を築いていく展開は、1910年代の婦人参政権論者(suffragettes)の運動を背景にすると、20世紀初頭の英国女性の自立の寓話とも読めるが、メアリは花園＝自然に順応するのと同じくらい、館＝既存の社会秩序にも順応している。メアリは貴族社会の転覆者ではなく、その存続に貢献する救済者であって、作者バーネットの軸足はあくまで守旧の側にある。
- 4) 梨木(2010)は『秘密の花園』に登場する動物が冷血から温血へと移行することを指摘している(2-3)が、これらの動物(fauna)も花園の植物(flora)も、やはり領主の支配に従う臣下の位置にある。ディコンが動物たちを連れて初めてコリンの部屋を訪れる場面は、領民の拝謁とも読める。
- 5) 「ほのぼのしたディケンズ」ともいえるガーネットの作風だが、ディケンズが「国

民作家」扱いされるようになったのが第二次世界大戦後やつとであったことを思えば、当時のこうした出版社の抵抗も理解できる。

- 6) ガーネットの画家としての代表作には、R・L・ステューヴンソンの『子どもの詩の園』(*A Child's Garden of Verses*, 1885)の挿画がある。
- 7) 『ふくろ小路一番地』の3年前に出版されたP・L・トラヴァース(P. L. Travers)の『メアリ・ポピンズ』(*Mary Poppins*, 1934)でも、人絹は最新流行のおしゃれとして登場する(22)。イギリスでは上の階級は天然繊維、下の階級は化学繊維、と衣類の素材が(経済的理由や嗜好から)生活習慣として分かれており、人絹はいかにも労働者階級らしい題材である。
- 8) 「海洋少年ジム」の詳細な分析については、武田(2014)を参照のこと。
- 9) この階級観は、ディズレーリ(Benjamin Disraeli)の小説『シビル——ふたつの国民』(*Sybil; or, The Two Nations*, 1845)やエンゲルス(Friedrich Engels)の『イギリスにおける労働者階級の状態』(*The Conditions of the Working Class in England*, 1845)に見るようなヴィクトリア朝の通念と比べると、革命的とすらいえる新しさを持つ。
- 10) この図式は登場人物のくらしだけでなく、ことばにもあてはまる。かれらの階級方言を訳者の石井は「俗語もまじえた口語」(325)と評しているが、この階級にとってはそれが「標準語」である。ことばはくらしのメディアであり、それが上の階級とは別の現実を生きている実感を伝えている。
- 11) すでに評価の確立した作品に、後年作者が手を入れる大胆さとしては、井伏鱒二の「山椒魚」級である。
- 12) マークとウィルの対立は長男 vs. 次男、馬 vs. 飛行機、ヴィクトリア朝 vs. モダニズム、フランパーズ屋敷 vs. ダーモット邸、守旧派 vs. 進歩派、という構図をとる。ことごとく正反対の選択肢において、いったんは後者が採択されるものの、結局勝つのはなんと前者、という展開となる。またマークとディックの対立は、三度の殴り合いという枠組をとる。一度目はディックが、妹を妊娠させたマークを殴り倒し、二度目はまたディックが、息子を流産させたマークを殴りつけ、しかし三度目はマークが、浮気中のディックをクリスチナの目の前で殴り倒す。「三度目がある」(IV 207)というマークの予告通り、最後に勝つのはここでもマークとなる。
- 13) こうした上流階級にとつての狐狩りの意味を具現しているキャラクターには、P・G・ウッドハウス(P. G. Wodehouse)の「ジーヴス(Jeeves)もの」に登場するダリアお婆さん(Aunt Dahlia)もいる。
- 14) この階級内の絆が、外からでも認識でき、他の階級との絶対的な疎隔をなすことが、ディックの「あなたとマークの間にはなにかがある——ずっとあった——深い深いところに」(IV 112)ということばに示される。そしてクリスチナとマークを結びつけるものが単なる男女の愛にとどまらず、狩猟でのあらゆる感情を共有してきた時間(I 209)、フランパーズ屋敷への強烈な愛情と帰属感(IV 45)、すなわち自我の存在基盤であることも、語りの中で言及される。

- 15) 物語の開始早々、クリスチナの乗馬の才能がフランパーズ屋敷に生まれ育った母親譲り (I 31-32) と判明し「正真正銘、狩猟家ラッセル一族の一員」(I 77) と周囲に認められることに、すでに結末の予兆はあったとも言える。また、屋敷に引き取られるまでは馬好きでもなければ (I 10) 馬に乗ったこともなかった (I 24) クリスチナが、伯父である屋敷の主人の命令で乗馬を習うことになった時、初めて乗る前から「わたし、乗馬が好き！」(I 31) と復唱して恐怖心を克服する場面は、『秘密の花園』でメアリがコリンのために「できる！」と繰り返す場面と重なる。その呪文の対象、すなわち「継承」の主人公が、他者ではなく自分、男性ではなく女性であるところに、『フランパーズ屋敷の人びと』の書かれた時代の新しさが出ている。
- 16) ウィルの車の運転がマークの馬の乗り方と同じくらい無鉄砲で自信满满である (I 129) ところにも、そうした含意が読みとれる。
- 17) 読者にまでリアルな擬体験の感覚を起こさせる迫真の描写は、イギリス児童文学ではランサムの『海に出るつもりじゃなかった』の船酔いの描写と並ぶ傑作である。
- 18) この壮挙に乗り出すクリスチナの乗馬姿は、歴史上英国を率いてきた騎馬の女神ブリタニア像と重なる。この志の壮大さに比べると、婦人参政権論者の「新しさ」などは、ごくちっぽけなものに見えてくる。作中でも、墜落死したウィルの友人の葬式で泣き叫ぶ運動家の母親に対し、家庭を放り出して息子に温かい食事も作ってやらなかったくせに、とクリスチナが憤慨する (II 178) 形で、婦人参政権論者への批判がなされている。
- 19) 「本能は道理に従おうとはしなかった」(IV 166) と表現される、後年のクリスチナのマークへの恋情は、「好みほどわからないものはない」(I 27) というウィルの予言が当たる形になる。このように、理性を超越した動因の存在がテキストの諸所で示唆され、からだとくらしの体験的感覚の重要性がクローズアップされる。
- 20) このタイム・ラグは、「マーク、愛しているわ」「それがわかるのに12年もかかるなんて」(IV 235) という作中の会話の年数と一致し、読者に物語と現実の対応を強く実感させる。
- 21) この三作品の表題の「花園」、「小路」、「屋敷」というトポスは、階級性が英国の国土にゆきわたっていることも示している。
- 22) 言語生活と密着したイギリスの言語教育の実情については、山本 (2006) を参照のこと。

〔参照文献〕

- Burnett, Frances Hodgson. *The Secret Garden*. 1911; London: Harper Collins, 2010.
- Engels, Friedrich. *The Condition of the Working Class in England*. 1845; London: Penguin Books, 2009.
- Garnett, Eve. *The Family from One End Street*. 1937; London: Puffin Books, 2014.

- Hibbert, Christopher. *The Story of England*. London: Phaidon Press Limited, 1992.
- Maskill, Louise. *Yorkshire Dialect: A Selection of Yorkshire Words and Anecdotes*. Sheffield: Bradwell Books, 2013.
- Peyton, K. M. *Flambards*. 1967; Oxford: Oxford University Press, 2014.
- . *The Edge of the Cloud*. 1969; Oxford: Oxford University Press, 2014.
- . *Flambards in Summer*. 1969; Oxford: Oxford University Press, 2014.
- . *Flambards Divided*. 1981; Oxford: Oxford University Press, 2015.
- The Secret Garden*. By Frances Hodgson Burnett. Exec. prod. Francis Ford Coppola. Dir. Agnieszka Holland. Perf. Kate Maberly, Haydon Prowse, Andrew Knott and Maggie Smith. 1993. DVD. Warner Bros., 2000.
- Travers, P. L. *Mary Poppins*. 1934; Orlando: Harcourt, Inc., 1997.
- 石井桃子。「訳者あとがき」。ガーネット 323-326。
- 掛川恭子。「改版のことば」。ペイトン 361-362。
- ガーネット、イーヴ。『ふくろ小路一番地』。石井桃子・訳。岩波少年文庫。東京：岩波書店、2009。
- グリスウォルド、ジェリー。「健全な考え——『秘密の花園』、『家なき子の物語 アメリカ古典児童文学にみる子どもの成長』。遠藤育枝、廉岡糸子、吉田純子・訳。京都：阿吽社、1995。237-254。
- 武田ちあき。「帝国教育の随天使たち——落第生の系譜と戦間期の学校小説」、『ヴァージニア・ウルフ研究』第31号。日本ヴァージニア・ウルフ協会、2014。87-103。
- 梨木香歩。『「秘密の花園」ノート』。岩波ブックレット。東京：岩波書店、2010。
- バーネット、フランシス・ホジソン。『消えた王子』、上・下巻。中村妙子・訳。岩波少年文庫。東京：岩波書店、2010。
- 。『秘密の花園』。畔柳和代・訳。新潮文庫。東京：新潮社、2016。
- 。『秘密の花園』。土屋京子・訳。光文社古典新訳文庫。東京：光文社、2007。
- 。『ひみつの花園』。中村妙子・訳。子どものための世界文学の森。東京：集英社、1994。
- 。『秘密の花園』。野沢佳織・訳。東京・西村書店、2006。
- ペイトン、K・M。『フランバーズ屋敷の人びと』、全5巻。掛川恭子・訳。岩波少年文庫。東京：岩波書店、2009。
- 松岡享子。「七十年以上愛されつづけた『ふくろ小路一番地』。ガーネット 327-333。
- 山本麻子。『ことばを使いこなすイギリスの社会』。東京：岩波書店。2006。
- 山本史郎。「隠されたテキスト——『秘密の花園』にはどんな花が咲いているのだろうか？——」、『名作英文学を読み直す』。講談社選書メチエ。東京：講談社、2011。10-44。